

銀座線

薄よごれた泥水の沁み込んだ階段を
疲れた肩が地下駅へと下り
庶民の痛めつけられた魂が
死に急ぎがちな歩みをこらえ
ポケットの手が切符を握りつぶす

地下鉄は過ぎる、彼等の視線の横を
肩をそびやかす苛立ちと
肩をすぼめる息苦しさ
交わる線路は同じ所をぐるぐると
抜けることも出来ない諦めをめぐり

もがき苦しむ奥なる囚人を押し込め
目を閉じて監視しつつ吊り革にぶら下がり
揺れに任せて映像をぼかし
一瞬の光の消滅にふと身構えて後
扉を抜けて薄汚れた階段を上る

(1985.1.19)